

## バートルビーと手紙

——「配達不能郵便」と「死者」をめぐる——

小 川 恭 佑

**Synopsis:** In studies of Herman Melville's "Bartleby, the Scrivener," the relationship between the Dead Letter Office, dead letters, and dead men in the epilogue has been a significant topic of discussion, and the function of Bartleby as a postal letter has been interpreted in a number of ways. Yet if Bartleby is to be likened to a letter in this way, further clarification is required of the nature of letters which Bartleby as a "letter" has and of the role that the narrator, his office, and "the Tombs" play in making this comparison. This paper examines these questions, explaining how the narrator tries to relieve Bartleby from his unfortunate status as a dead letter by giving him addressees, or in other words readers.

### はじめに

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) (1819-91) の「書写人バートルビー ("Bartleby, the Scrivener: A Story of Wall Street")」(1853) をめぐり、登場人物バートルビー (Bartleby) とは何者なのかについて、これまで様々な観点から論じられてきた<sup>1</sup>。先行研究の中でも、作品のエンディングにおいて言及される「配達不能郵便課 (Dead Letter Office)」(45) や、バートルビーと手紙の関係性に着目し、「書写人バートルビー」を解釈する研究がある<sup>2</sup>。バートルビーと手紙の比喩に関する先行研究の例として、読者が「書写人バートルビー」を読むことで、配達不能郵便としてのバートルビーが救済されるという指摘がある (Mitchell 337)。また、「配達不能郵便 (Dead letters)！ その言葉は死者 (dead men) のように聞こえやしないか？」(45) という一文に重点を置き、手紙としてのバートルビーと、その手紙の読み手である読者という枠組みを論じる研究もある (Thompson

409-11)。

とはいえ、バートルビーという存在自体に、具体的に手紙のいかなる性質が付随しているのか、バートルビーを取り巻く環境と手紙がどのように関係するのかという点は、これまであまり取り上げられてこなかった<sup>3</sup>。作中において、バートルビーが手紙として機能しているのだとすれば、彼がかつて働いていた配達不能郵便課、語り手の事務所、そして拘置所である「墓場 (the Tombs)」(17) が、どのように手紙の比喩に対応しているのかという点に、更なる解釈の余地があることだろう。本稿では、バートルビーが有する「手紙」としての属性を、「配達不能郵便」と「死者」の関係を軸にして考察し、その過程において、配達不能郵便課、語り手の事務所、拘置所の役割を明らかにする。そのために、まずは、メルヴィルが生きた19世紀の郵便制度において、配達不能郵便課がどのような役割を担っていたのかを確認したい。

## 1. ハーマン・メルヴィルと手紙

メルヴィルが生きていた1819年から1891年にかけて、近代国家としての体制構築を進めるアメリカ国内では、様々な変化があったのだが、その1つとして、郵便制度の発達が進められよう。19世紀はアメリカ合衆国政府が郵便制度を強く支援していた時期であり、郵便局で働く公務員が1816年には3,341人しかいなかったのに対し、1841年になると、14,290人まで増加した (John, *Spreading the News* 3)。それと共に郵便局の数も、1790年には75軒しかなかったが、1840年には13,468軒にも増えたのだという (John, *Spreading the News* 51)。

このような時代にあって、メルヴィルが手紙や郵便に少なからず興味を持っていたことは、『白鯨』(*Moby-Dick; or, The Whale*) (1851)、『ピエール』(*Pierre; or, The Ambiguities*) (1852) といった、「書写人バートルビー」以前の作品にも窺われる。『白鯨』の第53章「交歓」では、船が郵便配達人として描かれており、港で受け取った手紙を航海中に出会った船に

渡し、別の港へと運んでもらうことなどが詳述される (*Moby-Dick* 239)。『ピエール』では、主人公ピエール (Pierre) のもとに、姉の存在と父の秘密の過去を知らせる手紙がイザベル (Isabel) から、そして、ピエールを愛する思いが綴られた手紙がルーシー (Lucy) から、それぞれ送られてくる (*Pierre* 63-64, 311)。「書写人バートルビー」では、エンディングの中で手紙が登場し、法律家である語り手のもとに来る前に、バートルビーがワシントンの配達不能郵便課で働いていたという噂が語られる。とはいえ、「書写人バートルビー」は、単に手紙が言及されるだけではなく、配達不能郵便課にも触れているという点で、ほかの作品とは異なっている。

歴史的観点から見れば、配達不能郵便課では、お金や指輪、証書、その他の価値あるものを含む配達不能郵便は差出人に返却されていたが、その他の郵便は価値がないものとして、年に4回、ワシントンで燃やされていたという (John, “The Lost World of Bartleby, the Ex-officeholder” 636-37)。大多数の手紙は焼却という死を迎えていたのだ。たしかに「書写人バートルビー」のエンディングにおいても、後述するように、配達不能郵便に死の属性が重ねられている。「手紙 (letter)」という語は、作中において都合8回使われているのだが、そのうちの4回はエンディング以外においてである。郵便局へと手紙を持っていくように、語り手がバートルビーに指示する場面で2回、バートルビーが将来困ったとき、語り手に手紙を送れば助けてやろう、という主旨の会話と地の文で1度ずつ、それぞれ手紙が言及される (29, 32-33)。だが、配達不能郵便に関する言及は、エンディングにおけるもののみである。このエンディングの場面を分析するために、バートルビー、死、手紙の3つはどのような関係にあるのかを、次に具体的に検討していきたい。

## 2. 「配達不能郵便」と「死者」

語り手はバートルビーに関する噂を聞き、エンディングにおいて次のように語る。

その噂とはこのようなものだった。バートルビーはワシントンの配達不能郵便課の下級職員であったが、彼は政権交代によって、突然、解雇されてしまったということだ。この噂について考えるとき、私は、私を捉える感情をほとんど言い表せない。配達不能郵便！ その言葉は死者のように聞こえやしないか？ (45)

「配達不能郵便」と「死者」が、ここで初めて連想的に結びつけられる。バートルビーの噂を聞き、何とも言い難い感情に襲われる語り手は、「配達不能郵便」という言葉が「死者」のように聞こえるのだという。だが、これらの言葉の響きが似ているということはないだろう。仮に似ているところがあるとしても、「配達不能郵便」という音から「死者」を連想することは、一般論的に言えば、少し無理があるだろう。では、語り手はどのような文脈でこの発言をするに至るのだろうか。この点に関して、時実早苗は、手紙の受取人が何らかの理由で「死者」となることで、手紙も同時に「配達不能郵便」になるという論理的帰結を指摘し、それを「死の転移」と称している(131)。つまり、手紙が配達不能郵便、すなわち「死亡した手紙 (dead letters)」と化するの、その到達地点にいる人間の死が転移したからだということである。時実も指摘していることだが(130)、確かに語り手が「死の転移」という論理を理解していると思しき場面がある。

時々、折りたたまれた紙の中から、青ざめた事務員は指輪を取り出す。——その指輪をはめるはずの指は、恐らく、墓の中で朽ち果てている。迅速に慈善を果たすために送られた銀行手形——その手形が救いだしたであろう人は、これ以上、食べも飢えもしない。(45)

配達不能郵便課で働く事務員が手紙の中から指輪や銀行手形を取り出す場面だが、その指輪をはめるはずであった指が土中にあることを、語り手は想像する。銀行手形を受け取るはずであった人物が、食べも飢えもしない以上、すでに亡くなっていることを、語り手は想定する。語り手の意識の中で、手

紙の到達地点にいるはずの人間の死と、「配達不能郵便」という表現が、確かに結びついている。「配達不能郵便」という言葉が「死者」のように聞こえるという連想は、手紙の受取人が死亡することで、手紙も死亡することを語り手が知っているからこそ、生まれるものだとということである。

また、「配達不能郵便」について、次のような指摘もある。

配達不能郵便とは、何らかの理由で、その宛先に届かなかった手紙のことである。住所が間違っているか、受取人が転送先を伝えず、引っ越したか。又は、受取人が亡くなっているか。いずれにせよ、ある場所からある場所に言葉を伝えるという目的を達成できないという意味で、手紙は死亡している。(Miller 158)

配達不能郵便とは、それが配達できない理由は何にせよ、その宛先に届かなかった手紙を指す。つまりは、配達不能郵便には、宛先の不在という属性があるということである。先に引用した指輪と銀行手形に関する場面にも、宛先の不在というこの属性を見出すことができよう。ところが、「配達不能郵便」と「死者」を連想的に結びつけた直後、語り手は「人生の使命を帯びて、これらの手紙は死へと急ぐ」(45)のだと述べる。だが、すでに配達不能郵便になっている「死亡した手紙」が、死へと急ぐというのは、論理的におかしいのではなからうか。死が死ぬとはどういうことか。時実やミラーの解釈を踏まえると、受取人の死や不在が転移した結果として、手紙は「配達不能郵便」になる。しかし、実際のところ、それが「死へと急ぐ」以上、手紙自体はまるで生きており、死んでいないかのようなようである。つまり、作中における「配達不能郵便」とは、厳密に言えば、宛先に届かず配達不能になった状態から、少なくともその手紙が処分されるまでの期間にある、死んではいないが生きてもいる状態の手紙のことなのだ。少なくとも、語り手はそのように認識しているのだ。

### 3. パートルビーと「配達不能郵便」

手紙に注目して「書写人パートルビー」を読むと、そもそもパートルビーには、手紙が根本的に有するような、読まれる、そして、送られるという受動的な属性が備わっていることに気づかされる。冒頭において、語り手は、パートルビーについて、「この男の完全で満足のいく伝記のための素材は存在していないと信じる。それは文学にとって取り返しのつかない損失だ」(13)と語る。語り手はパートルビーのことを文学に紐づけて考える。語り手にとって、パートルビーは文学であり、読むべき対象なのだ。更に言えば、読む対象である本や手紙がみずから、読み手に対して、その詳細な内容を語りかけることはない。読み手が能動的にそれを読まなければ、内容はわからないままである。このような受け身の属性を体現しているかのように、パートルビーは作中、自分自身に関する情報を全く明かさず、どこで生まれたのか、何を考えているのかさえ口にしな。語り手のどのような質問に対しても、「私はそうしたくないのですが」(20)と言うか、またはその派生形の言葉を口にするのみである。手紙と同じく、語り手がパートルビーを能動的に読み解こうとしない限り、パートルビーという人物については、わからないままである。彼はあくまで受動的な存在であり続ける。

手紙が持つもう1つの特性、つまり、宛先に向けて送られるという点をめぐり、語り手が新しい事務所に転居する前後の場面に注目したい。転居する前の場面では、仕事をしないパートルビーをいかにして追い出すべきか、語り手が思いを巡らす様子が詳述される。「浮浪者 (a vagrant), 彼がか？ なんだって！ 動くことを拒むやつが浮浪者、放浪者なのか？ 彼が浮浪者になろうとしないから、彼を浮浪者とみなそうとするのだ」(38)と語り手は独りごつ。語り手が新しい事務所に転居した後も、パートルビーが以前の事務所に居座り続けたため、その事務所を新たに借りることになった法律家から、パートルビーを追い出すよう、語り手は圧力をかけられる。だが、パートルビーを追い出すことに失敗し、逃亡し、新しい事務所に戻った時、

語り手は机上に大家からのメモが置かれていることに気づく。「書写人は警察の元へと送られ、バートルビーは浮浪者として墓場へと移送された」(42)と、メモには記されており、かくしてバートルビーは「浮浪者」として拘置所へと送られたことが判明する。

このように、バートルビーが拘置所へ移送されるという展開の中で、「浮浪者」という語がしばしば用いられるのだが、この語が、宛先を持たない、すなわち、送り先に届けられることのないバートルビーの在り方を、明確に表しているのではなからうか。『オックスフォード英語辞典』(*The Oxford English Dictionary*)に拠れば、名詞の“vagrant”とは、定まった家や決まった仕事を持たずに、場所から場所へとさ迷い歩く人を意味する (vagrant, n, 1)。また、形容詞用法として、ある物がとどまっていない、固定されていない、という意味でも用いられる (vagrant, adj, 5, a)。すなわち、到着地点を持たない“a dead letter”とは、さながら“a vagrant letter”でもあるようだ。「放浪者」という語は、そもそも宛先の不在という、配達不能郵便が持つ属性と重なり合う。語り手が事務所を移転しなければ、バートルビーが「浮浪者」として、拘置所へ連れていかれる必要もないのだろう。つまり、語り手が転居することにより、バートルビーは配達不能郵便になるということだ。したがって、バートルビーが「浮浪者」として描かれるに至る過程は、彼が宛先の不在という配達不能郵便が持つ性質を獲得する過程でもあるということになるだろう。語り手が事務所を転居したことで「浮浪者」と称されるに至るバートルビーの描写は、彼の行く当てがないことを示唆するのみならず、手紙の比喩を用いるならば、宛先がない、それゆえに彼が配達不能郵便と化すこともほのめかしている。

事務所の転居後、バートルビーは「浮浪者」として、拘置所である“the Tombs”に連れていかれ、死を迎えることになる。そうしたバートルビーの姿は、前節において考察した、死んではいるが生きてもいるという、配達不能郵便の矛盾した特性を体現することになる。つまり、宛先はないが、まだ埋葬されてもいないという属性を帯びる者であるさまが浮かび上がるということだ。事務所の転居のせいで、バートルビーが「浮浪者」になる、つま

り「配達不能郵便」になるのだとすれば、語り手の事務所は、手紙たるバートルビーを受け取り配達する役割を担う郵便集配局のような場所になる。更には、バートルビーが亡くなる拘置所は、配達不能になった手紙が集められ、埋葬処分をされる場所、つまり配達不能郵便課の比喩となる。墓場という名を持つ拘置所で死亡するバートルビーの姿を、語り手は「壁の基礎の所で奇妙に丸まり、膝を丸め、横腹を下にして、頭は冷たい石に触れた状態の、やつれたバートルビー (the wasted Bartleby) を私は見た」(44)と描写する。ここで用いられている“wasted”という語には、捨てられた、処分されたという語義があるのだが (wasted, adj, 3), 「配達不能郵便」としてのバートルビーの姿を踏まえるのであれば、ここで「やつれたバートルビー」と訳出した表現には、「捨てられたバートルビー」というニュアンスが含意されているようにも見えてくる。語り手が事務所を移転したことで、配達不能郵便になったバートルビーの姿に、捨てられた手紙のイメージが重ねられているということだ。この「捨てられたバートルビー」は「動くことがなかった」(44)とも、語り手は付言するが、その描写には、配達不能郵便となり、行き場がなくなったことで、処分される他ないバートルビーの姿もほめかされている。

配達不能郵便として、死んではいるが生きてもいるバートルビーに対し、語り手は自分が彼を拘置所へ連行するように言ったのではないと口にする(43)。その拘置所は「思うほど悲しげな場所ではない。ほら、空があるし、草もある」(43)とも、語り手は付け加える。語り手はバートルビーを引き取ろうとはせず、むしろ拘置所にいることを勧める。手紙の比喩を用いて言えば、この時点で、語り手がバートルビーを引き取っていれば、論理的には、手紙としてのバートルビーに転送先が与えられることになり、バートルビーが焼却されることにはならない。だが、手紙を象徴するバートルビーを、語り手が引き取ろうとしないからこそ、彼は焼却され、死する手紙にならざるを得ないのだ。かくして語り手はエンディングにて、「哀れなバートルビーの埋葬に関する不足している説明を、想像力がたやすく埋め合わせてくれるだろう」(45)と口にする。手紙をめくりここまで論じてきたよう



に、パートルビーの「埋葬」とは、「配達不能郵便」を焼却する行為と同じ次元のものであることを、このエンディングが象徴的に示している。

更に言えば、拘置所が配達不能郵便課の似姿になっていることを踏まえると、パートルビーが用いる「好ましく (prefer) ありません」という台詞の意味も、多義的になっていく。“prefer”の語釈には「前に出す」という意味があり、“refer”, “transfer”, “offer”, “confer”など接尾辞“-fer”が付くものには、運ぶという意味が含まれる (Miller 154-55)。この先行研究を踏まえ、“prefer”という動詞が、送ること、すなわち、手紙を類推させる行為を含意する可能性も指摘されている (時実 135)。パートルビーが“prefer”を好んで用いるのは、そこに物の移動を想起させるニュアンスがあり、それはすなわち手紙の属性に接続するからだということである。

時実は“prefer”と手紙の関係性について、これ以上解釈を深めないが、その関係性を作中から読み取ることは十分可能である。パートルビーが事務所に来た直後、語り手にとって彼は読むべき対象であった。だがパートルビーは、郵便局へと行くよう語り手に頼まれたとき、2度もその指示を拒否する。それは、手紙としてのパートルビーの読まれるという性質が、語り手によって為されていない、すなわち、パートルビーが手紙としての役割を果たしていないことに関係しているのではなからうか。事務所の移転に伴い、パートルビーが配達不能郵便となった後も、彼はかたくなに事務所を離れようとしな。読まれることのない配達不能郵便となったパートルビーが次に向かうべきところは、手紙が焼却される運命にある場所、拘置所でしかないからだ。パートルビーが拘置所へと連れて行かれる瞬間を、語り手は「私が後で知ったように、その哀れな書写人は墓場へと身を処すると言われたとき、ほんのわずかな抵抗もせず、青ざめた不動の状態で、静かに黙認したのだ」(42)と説明する。ここにおいて、パートルビーは「好ましくありません」と口にせず、受動的に警官に従って拘置所へと連れていかれる。そのさまは、配達不能郵便と化したみずからが次に向かうべき場所を、彼自身が理解しているかのようでもある。

#### 4. バートルビーの復活－結びにかえて

ここまでバートルビーと配達不能郵便との関係性について論じてきたが、メルヴィル自身も伝記的事実において、配達不能郵便と関係がある。ハーマン・メルヴィルの兄であるガンズヴォート・メルヴィル (Gansevoort Melville) (1815-46) は、『タイピー』(Typee: A Peep at Polynesian Life) (1846) の出版に尽力した人物である。1846年5月29日にハーマンは兄に対して、出版された『タイピー』が絶賛された喜びを綴った手紙を送っている (Correspondence 40-41)。だが、ハーマンがその手紙を書き、投函した日のほぼ3週間前にあたる5月12日に、兄はロンドンで客死していた (Leyda 214)。「メルヴィルが5月29日に手紙を書いた直後に、ガンズヴォートが死亡したという報告がハーマンの家族に届いた」(Robertson-Lorant 146) のだ。かくして喜びに満ちた彼の手紙は、受取人であるガンズヴォートの死によって、配達不能郵便になったのだった。「書写人バートルビー」において、メルヴィルが語り手をして「配達不能郵便」と「死者」をエンディングにて連想させる営みには、このガンズヴォートの存在が見え隠れする。しかし、この連想から見えてくるものは、それだけでもない。

「書写人バートルビー」が出版される前年、1852年9月23日に発行された *Daily State Register* という雑誌に、配達不能郵便に関する記事があり、その見出しは“DEAD LETTERS—BY A RESURRECTIONIST. WRITTEN FOR THE ALBANY REGISTER” というものであった (Parker 90-91)。キリストの復活を意味する語に由来する“resurrectionist”とは、葬られた配達不能郵便の同封物を掘り起こす人物のことである。つまりは、死者と関連付けられる配達不能郵便は、「復活 (resurrect)」する行為を連想させるものでもある。

「書写人バートルビー」は、語り手の回想という枠組みで綴られる。そして、その物語はバートルビーが拘置所で亡くなった時点で語られるのではなく、死後数か月が経ち、語り手がバートルビーの過去の噂を聞いた後に語ら

れる。つまり、作者が語り手に「書写人バートルビー」を語らせるためには、エンディングで触れられる噂が必要不可欠であったということである。語り手がバートルビーの噂を聞いた後に、この物語を語る理由は何なのか。それは、本稿の文脈に沿うならば、バートルビーを「配達不能郵便」という浮浪の状態から解放するためではなかろうか。「配達不能郵便」と「死者」には、ともに宛先の不在という属性があり、それがバートルビーのことでもあると語り手が気付いたからこそ、語り手は「書写人バートルビー」を語り始めるのだ。

語り手は日曜日に事務所に立ち寄ったときに、バートルビーが事務所の中にいることに気づき、「なんと悲惨なほど友がいなく、孤独であることがここで明らかにされていることか！彼の貧しさはすさまじいものだ。しかし、彼の孤独はどれほどひどいものであるのか！」(27)と言いながらも、最終的には彼を見捨てることになる。その罪意識をあがなうために、語り手はバートルビーをめぐる物語を読者に伝えんとするのだ。そして、読者がその物語を読むことで、バートルビーには読者という宛先が与えられる<sup>4</sup>。宛先不明の手紙はデッド・レターと呼ばれるが、決して死んでいるわけではなく、いつの日か「復活」し、配達される可能性が常にある、と東浩紀が言うように(87)、手紙としてのバートルビーに読者という宛先が与えられるということは、すなわち、バートルビーが「配達不能郵便」ではなくなるということである。バートルビーが拘置所である墓場から立ち上がることはないが、彼の物語は立ち上がり、その物語は、語り手の精神、記憶、良心という記録の中で、不死性を獲得するという指摘があるが(Fisher 440)、それはつまり、語り手がこの物語を綴ることで、バートルビーを孤独な「浮浪者」の立ち位置から救済するということである。それが二重の意味での、死せるバートルビーの「復活」なのだ。

\*本文および注における「書写人バートルビー」と先行研究の日本語訳は、全て拙訳である。

## 注

<sup>1</sup> 例えば、ウォール街という空間や、語り手とバートルビーとの間に置かれる緑のついたてを中心に考察し、バートルビーがエイハブ (Ahab) と同様、人類に背を向けるという致命的な間違いを犯しているという解釈や (Marx 626)、どこか幽霊のように青ざめているバートルビーの様相に着目し、彼が生と死、自然と不自然との間に存在する人物であるという指摘もある (Dayan 15)。

<sup>2</sup> Herman Melville. "Bartleby, the Scrivener: A Story of Wall-Street." 1853. *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, edited by Harrison Hayford et al., Northwestern UP/The Newberry Library, 1987, pp.13-45. 以下、作品からの引用は全てこの版に拠り、引用末尾の括弧内に頁数を記す。

<sup>3</sup> 藤本幸伸は、「象徴的に解釈される配達不能郵便とは別に、この物語の中で郵便局と手紙はかなりの頻度で言及されるが、郵便局や手紙とバートルビーとの関連はあまり注目されていないように思われる」(24) と言う。そして、当時の資本主義や民主主義を踏まえ、バートルビーの救済失敗とその意味について考察している (34-36)。とはいえ、郵便制度において、語り手の事務所や、拘置所である墓場がどのような役割を担う比喩として考えられているのか、という点に、更なる解釈の余地がある。

<sup>4</sup> 西谷拓哉は、「書写人バートルビー」とは、死の世界にいるバートルビーにもう一度届けるためにしたためられた、語り手の手紙であると指摘する (67)。

## Works Cited

- Dayan, Colin. "Bartleby's Screen." *Leviathan: A Journal of Melville Studies*, vol. 17, no. 2, 2015, pp. 1-17.
- Fisher, Marvin. "Narrative Shock in 'Bartleby, the Scrivener,' 'The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids,' and 'Benito Cereno.'" *A Companion to Herman Melville*, edited by Wyn Kelly, Blackwell Publisher, 2006, pp. 435-50.
- John, Richard R. *Spreading the News: The American Postal System from Franklin to Morse*. Harvard UP, 1995.
- . "The Lost World of Bartleby, the Ex-officeholder: Variations on a Venerable Literary Form." *New England Quarterly*, vol. 70, no. 4, 1997, pp. 631-41.
- Marx, Leo. "Melville's Parable of the Walls." *Sewanee Review*, vol. 61, no. 4, 1953, pp. 602-27.
- Melville, Herman. "Bartleby, the Scrivener: A Story of Wall-Street." 1853. *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, edited by Harrison Hayford et al., Northwestern UP/The Newberry Library, 1987, pp. 13-45.

- . *Correspondence*, edited by Lynn Horth, Northwestern UP/The Newberry Library, 1993.
- . *Moby-Dick; or, The Whale*. 1851. Edited by Harrison Hayford et al., Northwestern UP/The Newberry Library, 1988.
- . *Pierre; or, The Ambiguities*. 1852. Edited by Harrison Hayford et al., Northwestern UP/The Newberry Library, 1971.
- Miller, J. Hillis. *Versions of Pygmalion*. Harvard UP, 1990.
- Mitchell, Thomas R. “Dead Letters and Dead Men: Narrative Purpose in ‘Bartleby, the Scrivener.’” *Studies in Short Fiction*, vol. 27, no. 3, 1990, pp. 329-38.
- Parker, Hershel. “Dead Letters and Melville’s Bartleby.” *Resources for American Literary Study*, vol. 4, 1974, pp. 90-99.
- Robertson-Lorant, Laurie. *Melville: A Biography*. Random House, 1996.
- Thompson, Graham. “Dead Letters! . . . Dead Men?: The Rhetoric of the Office in Melville’s ‘Bartleby, the Scrivener.’” *Journal of American Studies*, vol. 34, no. 3, 2000, pp. 395-411.
- 東浩紀『存在論的、郵便的——ジャック・デリダについて』新潮社、1998年。
- 時実早苗『手紙のアメリカ』南雲堂、2008年。
- 西谷拓哉「『バートルビー』と同語反復」、『神戸大学教養部論集』第46巻、1990年、53-74頁。
- 藤本幸伸「配達不能郵便係のバートルビー」、『Sky-Hawk』第5号、2017年、24-40頁。

